世界統治

しづや　りふかふ

考えに耽っていた。

朧な記憶だが、宇宙の直径は四百数十億光年と記した本を読んだ記憶がある。宇宙の開闢は百数十億年前という記憶もあった。光りよりも速いものはないということを学んだ憶えもある。すると、これらことは矛盾していると思った。光りより早いものがなかればビッグバンのスピードは光速と同じかそれ未満であり、宇宙の直径は四百億光年に達するはずがない。算数というものが正しいとすればだが。

しかも我らが四次元の時空（三次元の空間と一次元の時間）宇宙は、十一次元の時空（十次元の空間と一次元の時間）にあるプレートのようなものだという説をかなり前に読んだ。もう最新の考えではないかもしれないが、そうすると他にも、いくつも存在するかもしれない平行宇宙とは、どういう関係（係わり？　位置関係とか）になっているのだろうか。

そういうふうに考える前に、我らのこういう観察や判断やその総合である認識は、正鵠を得たものなのか、正しいのか、という疑念が湧く。

だがそれは間接的なものだ。つまり自らの認識に映った認識を、水鏡に映った月を愛でるようなものだ。正確さの期待は、直截的観察より低いと、経験知上では直観されている。判断への批判を、判断を用いて行うのは、我らの通常の論理定款上は、無効な検証である。論理定款というものの内容、設定（意義、位置、フォルムなど）、在り方及び存在が正しいとすればだが。

だが、それをどうやって検証するのか？　観察への批判と同じ轍を踏むのは、むろんであるが、その上に、論理以外の方法で検証しなければならないという考えは、論理定款が正しかった場合に適用されるが、そのような考えも論理定款に遵った思考である。

論理を越えて直観でという者もいるだろうが、経験を観照し給え。直観ですら分別がある以上、論理定款によって捌かれているのである。

我らは呆然唖然として、次の句も継げぬまゝ、足を置く處なく、曰うも曰わずも定まらず、まゝ（眞々）でいるしかない。

宇宙はかく在りと思うしかない。

それにしても今から遡れば宇宙は百数十億年前に始まったと言えるかもしれないが、全体時間の中でいつの時点であったかを指し示せないのではないだろうか。

時空は宇宙開闢とともに始まったからである。

そういう方向性から見るならば、宇宙開闢の時点は存在せず、逆に、今とも、未来の時点だとも言える、という考え方もありではないだろうか。

とすれば、我らの存在は何なのか。時空とは。存在とは。

現象学的に、直観のまゝに受け止めるしかない、…のだろうか？

何となく、時間や空間が相対的なものであることも、感覚に馴染むような気がしなくもない。飽くまでも〝感じ〟でしかないが。つまり、それに関する論理的な説明を自分はできない。

きっと存在も相対的なものなのだろう。諸行無常諸法無我か……な？

そう思ったとき、彝之火々禽は忽焉と覚った。

心機に因って、左右の手が無意識に指を組み絡め、精緻なる蓮華宝珠荘厳真義の印契を結んでいた。

神彝而咽厨御と合致し、大いなる能を得る。

彼は一足飛びに都心に現象した。

六本木交差点の中心に立って宣言する。

「私は世界を統治する」

車が警笛を一斉に鳴らす。信号待ちの人々は吃驚し、唖然とする。

いつまでも退かないので、車から降りてくる若者や警察官がやって来る。

「諸悪莫作衆善奉行」

そう言うと憤る若者の服は砂のように崩れて裸身となり、心は優しくなった。警察官の服は絹の衣となって、拳銃は蓮の花となる。

「貪嗔痴よ、去れ」

周囲にいた人々は裸身となって天から降る甘露を口にし、寛喜した。

火々禽は思念して櫓を築く。やがて自衛隊がやって来たが、

「生滅滅已」

そう言うと、戦車も装甲車もすべて砂となって散った。彼は宣言する。

「日本を統治する」

彼はあらゆる社会活動を認めたが、平均賃金の十倍以上の個人資産を認めなかった。

「なぜなら一人の人間が他の人間の十倍以上働くことは不可能だからだ」

過剰な儲けは社会に還元することを義務附けた。全国民を公務員として、社会に責任を持って働かせる。しかし、絶対正義の知を以て人々を評価し、給与には差異を設け、共産主義的思想は採り込まなかった。特に現世の一党独裁型の共産主義を烈しく非難した。

「なぜなら、批判されないモノは必ず腐敗する。この世に絶対といえる物事は数少ないが、数少ないうちの一つ

だ」

彼はあらゆる批判に耳を傾けたが、すべての人の心の奥底を見抜き、それを現象させることができたので、謀り企み私利私欲のために論を弄する者を処刑した。悪には徹底して対処した。

「悪は速やかに排する。私はこのように宣言した。これを聴いていながら、罪を犯した者は排斥を受諾したものと見做し、即刻処する。反社会的組織は無条件に殲滅した。一切の弁明を認めなかった。弁護士の反論は一笑した。

「人権は人権を尊ぶ者のみが有する。人権は万民生得の権利ではあるが、無条件永劫権ではない。人は行為によってその権利を維持する。他人の人権を尊ばないモノには人権はない」

やがてアメリカ合衆国とロシア連邦と中華人民共和国と欧州連合が進攻して来たが、すべての兵器・武器・装備は蝶となって花園を舞う。凄まじい霹靂を伴って雷霆がクレムリンと中国共産党とホワイトハウスに堕ちて壊滅させたが、死傷者は皆無で、落下地点は桃源郷と化した。

世界は投降し、ひれ伏す。

マフィアもギャングも不正な組織も過激派もすべての暴力も攻め滅ぼした。かように民事のみならず、民族・宗教・国家によるすべての紛争を止めさせ、数千年の歴史に遡ってすべての事実を超極微詳細に亘って個別に分けて明晰にし、真実を睿らかにして超極微詳細に是非を決定し、大いに自らを省みさせ、人類への完全理解による朋友愛ですべてを解決した。

「学問を講ずる」

そう宣言して火々禽は教えを説いた。ただし、

「教えを強要しない。栄達のために教えを学ぶことを禁ず。私がすべての心を見抜けることを忘れるな。私は宗教の自由を認める。主義も同様である」

やがて優秀な若者たちが輩出する。

そのうち特に睿智に秀でた曼珠沙華という青年が火々禽に次のように問い糺した。

「諸行無常諸法無我ならば真偽正誤善悪もないのではないか」

火々禽は静かに言った。

「それゆえ、それもない」

曼珠沙華は恐るべき荒野を見た後、忽然と覚悟した。

かくして永遠なる、平和と繁栄と幸福が咲いて燦めく。